

沼津市若山牧水記念館

第28号

2002. 3. 20

編集・発行
〒410-0849

社団法人 沼津牧水会
沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX (055) 962-0424
E-mail:bokusui@thn.ne.jp

大正十一年一月の葉書

たれやらが
ひとりおこりて
ひとりなく
ひとりおもへば
おもしろきかも
やアやアの
やつこらやアの
やアなれば
みんなおそれて
すくみをるべし
いっそのこと
どうだ まこみこ
よびつどへ
しゃつちよこだちでも
やらかせやらかせ

大正十一年一月八日に牧水から沼津町在上香貫の喜志子夫人に出された葉書の文面である。

裏の絵は真ん中が喜志子、左がみこ（長女みさき六歳）右がまこ（次女真木子三歳）そして前に寝ているのが富士人（次男八か月）であろう。

沼津に転居したのが大正九年八月十五日。翌年の正月は香貫の家で過ごしたが、次の大正十一年には元日から伊豆土肥温泉に滞在。この葉書はその折に出された。



乳飲み子を含む四人の子を置いて、正月というのに一人温泉に遊ぶ牧水に、家計の苦勞と育児に疲れはれた喜志子さんの怒りの手紙が届いた。その返事とはとても言えない、諧謔的な牧水の葉書だが、苦しい家計の事は知つていても旅に出ないと治まらない牧水の流離の心は、こんな形でしか表すことが出来なかったのだろう。

牧水の温泉逗留は、現実逃避というより、より積極的な、歌集編纂、旅行記の整理など、言わば仕事場としての逗留であった。家においては、友が集まり、友が来れば酒が出る。繁雑な生活の場を離れて文学の世界に浸りたかったのかも知れない。しかし、生活の苦勞も子育ても任せっぱなしにして、悠々自適の旅を楽しむ牧水には、夫唱婦隨を地でゆくような喜志子さんもさすがに堪忍袋の緒が切れたのだろう。その怒りは敵しいものだったにちがいないが、残念ながら喜志子さんの手紙は残っていない。

ところで牧水は、この手紙を反省したのか、翌九日喜志子さんを宥めるように、土肥へ来るように呼び掛け、喜志子さんもそれならと出かけたのだが、折悪しく海が荒れて船酔いが激しく、翌日には沼津の家引き上げざるを得なかった。一つには土肥に滞在中、条虫の寄生がみつかったことも急ぎ帰った原因ではあったが、医師にかかったのは一週間後の一月二十日。入院して治療を受けたが、流感にかかり高熱を出して、更にそれが家族全員に移り、悲惨な状況になってしまった。「やつこらやアのやア」などと気楽なことでは済まされぬ手酷いお仕置を受けた形になったのである。しかし、病が癒えた後の三月の末から伊豆湯ヶ島温泉に遊び、かの有名な「山桜の歌」一連を作るのである。牧水の面目躍如というべきか。（須永 秀生）

新宿二幸前の茂吉

後藤直二
(歌人、「群帆」代表)



斎藤茂吉 (昭和26年)

斎藤茂吉とじかに会話を交したのはただの一度、茂吉六十八歳、筆者二十三歳の時であった。場所は新宿駅東口食品デパート二幸前、日時は昭和二十五年四月十六日十一時半過ぎ。

その日、大学を終え静岡に赴任する私の送別会を、同人誌「芽」の会員が新宿御苑で開いてくれることになり、新宿駅東口で落ち合うことになった。私のほか吉田漱(のち斎藤茂吉文学賞受賞)、国見純生、高橋恵(のち日大医学部長)、山口智子、湯村永子ほかであった。送別会と言っても、御苑の芝の上で持参の弁当を食べるだけのことで酒はなかった。

東口で待ち合わせをしているうち、一人があれは茂吉ではないかと声を出した。見ると駅前広場につづくバス通りの向こう側、低い柵にもたれるようにして、禿頭白髯の老人が立っている。アララギ東京

歌会で何度も見ているので私が「うん、たしかに茂吉だな」と言うと、女性たちが「後藤さん、茂吉を散歩にさそってよ」と言う。大先生をかげで呼び捨てにするのは当時の若者の慣習であった。

うちつれて道路をわたり、茂吉の前に行つて挨拶した。そこから私の悪戦苦闘が始まった。

「ぼくたちはこれから新宿御苑に行くのですが先生もいかがですか。」

「からだが疲れてダメだな。」

「それではそばでも一緒に。」

「いま食べてきたところだ。」

「それではコーヒーでもいかがですか。」

「このごろ舌が荒れてダメだ。」

茂吉は具体的に説明し、私が高橋を医師だと告げると、茂吉は彼のほうを向き「ほらこんなんぐあいだ」と言つてあんぐりと口をあけべろりと舌を出して見せた。高橋はもつともらしいことを言い、てれて顔を赤くした。

私のさそいがすべて空振りとなり、話のつぎほをなくしていると、横から吉田が、

「先生はここでなにをなさっているのですか」ときく。
「人間たちを見ている。」とぼつりと言う。
私たちが口ぐちに別れの挨拶をして御苑のほうへ

歩き出してからも、茂吉はなお凝然と人波を見つづけていた。

だいぶたつてから、茂吉はこの日のことを歌にしているかどうかを調べてみた。茂吉は少なくとも三十分ほどひとつところに立つて「人間たちを見ている」。歌がないはずはあるまいと見当をつけたが、これも空振りに終わった。空振りばかりである。

当日の斎藤茂吉日記を抄記すると「日曜、ハレ、注射、九時半二鈴木忠一氏訪問、明治神宮邸内二行き、立寄相談、午後土屋筆司氏訪問、留守。明治神宮参拝内苑。土屋文明頼ミノ手紙。」

もとより私たちとの邂逅は記していない。鈴木忠一は落合京太郎、土屋筆司は文明の弟である。



新宿駅東口旧二幸デパート前で 向つて左が斎藤茂吉、右は筆者 (昭和25年4月16日)

手記(手帳)、歌集にも、それとおぼしき作品は見あたらないのであるが、昭和二十五年前から何首か引いてみよう。

われつひに六十九歳の翁にて機嫌よき日は納豆など食む

場末をもわれは行き行くある処満足をしてにはとり水を飲む

片づけぬくくり枕より蕎麦がらが畳のうへへ運命のこぼれ

円柱の下ゆく僧侶まだ若くこれより先きいろいろの事があるらむ

日本橋ひとり渡れどおのがじしほかの人らもわたりて居るも

内苑の木立のなかにほほの木若葉の色やしたたるがごと



最晩年の歌集『つきかけ』

茂吉は戦後も自分の年齢を数えどしで数えた。一首目の六十九歳は満年齢では六十七歳である。二、三、四首目、それぞれ特色がある。そして五首目は、

場所は日本橋であるが、状況はわれわれが見た新宿二幸前の佇立凝視を思わせるものがある。こういうあたりに茂吉の作歌の秘密をうかがうことができる。写生とは言いながら、別の場所、別の日時を組み合わせたモンタージュの手法である。作歌は創作行為であるからそういう手法があつていい。茂吉は、浅草へ行った時、前年の体験と当年の体験を組みあわせて歌にしている。終りの歌は、日記によれば、あるいはわれわれと会った日の午後の歌かもしれない。

昭和二十五年は茂吉にとって最晩年である。歌集を見ると、この年の作品として概算二百七十六首を収載している。月平均二十三首である。多作の茂吉としては少ないが、翌二十六年は八十八首月平均七首と激減している。二十七年はたったの八首、そして二十八年二月二十五日に死んだ。

二十六、二十七年の作から二首を引く。

わが色欲いまだ微かに残るころ渋谷の駅にさしかりけり

いつしかも日がしづみゆうつせみのわれもおのづからきはまるらしも

二首目が絶詠とされているもので、あるいは門人の誰かの手が入っているのかもしれない。私たちが出会った昭和二十五年は茂吉の歌業にとつて、勢いを保持した最後の年であり、その後はよろよろと情性で歩きつづけたと言つてよいのであろう。

今は食品パート二幸はなくなつたが、新宿駅東口に行くことがあると目はおのづからそのあたりに向き、茂吉の面影が怫然と浮かんでくるのである。



*この随想は、平成十三年十月七日に行われた第四十八回沼津牧水祭短歌大会でのご講演をもとに、ご執筆いただいたものです。

筆者プロフィール

群馬県生まれ。昭和二十二年アララギ入会。東大短歌会の常任委員、同人誌「芽」編集(昭和二十三年(二十五年)などを経て昭和五十五年季刊誌「群帆」創刊編集。歌集に「胆振野」「印象化石」「森のほとり」ほか。評論集に「短歌の近代と現代」「茂吉と文明」ほか。現在NHK学園講師。現代歌人協会会員。蒲原の日本軽金属に勤めたことから静岡との関係は深く「群帆」の会員も多い。

第六回若山牧水賞に 歌集『歩く』の河野裕子氏

かわの ゆうこ



受賞者の河野裕子氏

歩くこと歩けることが大切な一日なりし病院より帰る

あつき煮て病む身養ふことことこと人のこころに近づく

授賞式に引き続き、選考委員の馬場あき子氏の『破調の牧水』と題する講演が行われた。馬場氏は、牧水短歌に一時期見られる破調の特徴について、歌集『みなかみ』から二十首を取り上げて詳しく語った。この時期の牧水は、歌人としての地位が高まる一方で、諸般に行き詰まり、長男としての重責もあり、深い苦悩のなかにあった。そんな苦しさを直截に表現できずに、破調の歌が作られていった。そこに牧水の肉声と本音を感じる。

破調になりながらも牧水の短歌は韻律的であった。それは、言葉の繰り返し、比喩、対句、長句を短句でしめる等の日本語的技法が用いられているからであろう。初期の頃から『万葉集』などの古典に深く立ち入っていた牧水ならではの深さ。

牧水の破調と同時代の啄木の三行書きとの類似点を考えると、共に短歌の新しい方向を目指したものであったと思われる、破調の中にかけた牧水の韻律論が浮かび上がってくる。と締めくくった。

河野裕子氏は、翌二十日、延岡市で『歩く牧水』という題で講演を行った。

小学生向けの学習国語辞典に載っていた牧水の「つみ草のほひ残れるゆびさきを洗ひて居れば野に月の出づ」が初めて覚えた短歌であり、短歌は

読む人が目に見えるように作れと言われているが、この歌から浮ぶ情景が長く記憶に焼きついていて、と牧水の歌との出会いを述べた。

牧水がよく旅に出たことについて、西行の「吉野山こずゑの花を見し日より心は身にこそそはずなりにき」を引き、牧水は西行と同様に、心と身とがそわない違和感から情緒が不安定だったのではないかと。牧水が旅を好んだのは「あくがれ」すなわち「心が本来ある場所から離れてさまよい、そわそわしていた」からだろうと語った。

牧水が第二歌集『独り歌へる』の自序で「何等憚る所なく我と逢ひ我と語る時は、誠心こめて歌を詠んで居る時のみである」と、情緒の不安について述べている言葉に深く共感できるし、河野氏自身も不安な時の方がよい歌ができるとも語った。

また、牧水の破調の歌について、定型ががたがたになってもしつかり調べを作っており、内容は感傷的であっても調べが健やかで風通しがよい。理屈ではなく身体から出てくる調べを自分で掴むことにより、何かを実感していたのではないかと分析した。

若山牧水賞も六回と回を重ね、文学賞として社会的認知を十分に得たようである。これも宮崎県、宮崎県教育委員会、宮崎日日新聞、延岡市、東郷町ほか関係各位の熱意と努力の賜である。今後とも大いに注目していきたい。

なお、このたびの授賞式に、本会から林茂樹理事長、大澤敏夫会員と事務局の市川真理が参加し、受賞者や選考委員をはじめ多数の方々と親しく交流する機会を得、宮崎県庁および東郷町役場や延岡市の皆さんの大歓迎を受けた。大変有意義なときを過ごすことができたことに、厚く感謝申し上げます。

第六回若山牧水賞の授賞式が、去る二月十九日宮崎観光ホテルにおいて行われた。受賞者は歌集『歩く』の河野裕子氏。第三回受賞者永田和宏氏の夫人夫婦そろっての受賞となった。河野氏は昭和二十一年熊本県生れ。中学時代から短歌を作り始め、京都女子大学在学中に角川短歌賞を受賞。「塔」選者。現在NHK歌壇、毎日新聞歌壇等の選者でもある。

河野氏は一昨春秋、病に倒れて歩くことができなくなり、歩けることの幸せを実感したことから、歌集の題名は『歩く』に自ずと決ったそうだ。『歩く』（青磁社刊）は第九歌集で、家庭や身近に起った出来事を鋭い洞察力で詠んでいる。自選十五首の中から数首を紹介する。

捨てばちになりてしまへず 眸のしづかな耳のよい木がわが庭にあり

さびしさよこの世のほかの世を知らず夜の駅舎に雪を見てをり